

社会における循環装置としてのアート、都市における水脈の暗渠化のアナロジー

吉田山

このテキストは、MEET YOUR ART FESTIVAL（以下、MYAF）のART EXHIBITION「Ahead of The Rediscovery Stream」に向けてのキュレーションノートである。

MYAFは、天王洲アイルにある寺田倉庫エリア一体で開催される音楽ライブや絵画、彫刻・立体作品、空間芸術、フードやクラフト、グッズ等が展開されるカルチャー誌が都市や街として立ち上がったかのような編集的空間である。いや、雑誌自体が都市の模倣でもあり魚拓のようなものでもあるといえる。展覧会は、歴史やアーティスト視点や建築家、デザイナーの問題意識を扱う、空間的な雑誌ともいえるだろう。

今回、MYAFの中の一つにART EXHIBITIONというエリアがあり、私はそこでの共同キュレーションを務めている。

そして、ダンサーであり俳優の森山未来さんがアーティスティック・ディレクターとなり、全体の方針とタイトルを決定した。

「Ahead of The Rediscovery Stream」（以下、ARS）

直訳していくと、「再発見した流れの先」となり、これはすでにある物の価値を再発見し編集やキュレーションするという態度そのものでもあり、ストリームを再循環させるということで価値や物事を輪廻転生させていくという循環への考え方とも言える。

そして、アートは、この激動の社会において何をもたらすのか？ についても考えていくこととなった。第一に私自身が去年の10月から育児をしていること、そして、去年このMYAFに招き入れてくれた山峰潤也というキュレーターが存在と、彼が今年の始めに急逝したこと。この2つの人生のターニングポイントの、今回の展覧会への影響は大きい。

上記の経過から、今回は吉田山自身の解釈や意図によってテーマを拡張させながら取り組んだ。まず、産業廃棄物を出さないサーキュラーエコノミーの考え方を取り入れる。次に、共同体と個人の死、文化の継承ということを考えて。つまりどちらもリソースの継承ともいえる。育児をしているとこれまで自分が持っていた自分だけの時間はなくなり、家族の時間と一体化する感覚になる。時間が流出していく感覚、これも継承の一つだといえる。流れ出した時間が水のように終わりなく巡っていく感覚。

時間の循環装置、人間でいう心臓として、アートをポンプのようなものだと考えよう。

アートは人間や社会、共同体の根源的な心臓として、血流を押し出し、循環させるポンプの機能を担うものではないだろうか。

衣食住とは別のもう一つの心臓、隠された社会のインフラであると考ええる。

この流れは、いつから隠れてしまったのだろう。

アートはワークライフバランスの外側にあるともいえる。根源的な我々の活力のバランサーのように、社会の機能の一つとしてあるのではないだろうか。すなわち社会というものが一つの身体としてその心臓として機能し、生命エネルギーの循環と交換を司るということだ。

都市においての水、東京に限らず、大きな街、都市は水路と共に発展した。
水流は都市の血流ともいえる。その循環や交換を促す装置や機能を持つのがアートである。

そのアートという見えない存在に対し、必要不可欠な空気のようなものを掴み取り固形化させる者がアーティストであり、固形化したそのものが作品と呼ばれ、その作品を設置した空間はアート展となり、ここでキュレーターとはアーティストと空間、そしてそこに集う関係者や鑑賞者の仲介者ということになる。展覧会が心臓だとするならば、キュレーターはなんだ？

大自然の中に、人の住まう場所、ビジョンの集まりである集落が形成されたとき、すでに一年中流れ落ち続ける滝や、雨の後に立ち上る霧など、水脈のサイクルは剥き出しのスペクタクルとして可視化され続ける。

それは雄大な美であると同時に、近づけば死を招きかねない脅威でもある。しかし、死生を超えてその流れの中に住まうことによって、私たちはこのストリームの一員であると認識する。その水を飲み、排出し、そして雨や川の水量の変化で自らの生と死の超越が認識される。思い起こせば、「物心がつく」というのは、自分が「死」ぬということを経験した時なのではないだろうか。

これは2023年に奈良県南部・下北山村での滞在中に私が体験したことである。村に住んでいる者の一人が「山は水だ」と語った時、認識が変化したことを今でも思い出す。実際の機能として、山は木の根と土の連携によって水を蓄える巨大な循環装置であるが、それは目視できないお勉強的な知識だったものが、突如目前に水としての山が現れる。山が人間のライフスケールを超えたものとして、タイムトンネルとして現れる。私もこの水の循環の中の参加者なのだと認識する。

能楽においては、「シテ」（主人公）が過去を現前させる装置としての〈井筒〉における井戸の縁が山に置き換わり、山自体が時空を超える装置「山タイム・トンネル」として機能するとすれば、我々の存在を規定する複数のストリームに意識が合流し、共同体の意識、そして山への同化をも経験する。下北山村自体が、能を上演し続ける舞台装置となる。

しかし、私は普段、そのようなことを認識する力を持たない。持つ必要のない場所、人間中心の経済活動の舞台である都市に住んでいる。

生活の安全や効率を優先した都市は、我々の生活に不可欠であり、人生観を超越へ誘うための環境との関係性を適宜ブラックボックス化し、コントロールする。暗渠のように閉ざすことを常態化させ、隠すことを躊躇わない。

関係性が不可視となることで、分断され商品化された我々のストリームは細切れとなり、存在論的に紐付けて認識することは困難になる。この感覚は、まるで自身の身体に流れる血という

水路や時間すらも暗渠化され、自己からもこの流れが隠蔽されてしまったゆえの個人主義が立ち上がったと考えることができる。

生活領域を増やすという名の下に水脈ストリームに蓋をし、効率の良い地面を増やすことは、同時に何かを隠蔽することを常態化する意識を醸成する、効率のためのトレードオフということである。

これは水脈だけではない。我々の精神や生活にあったであろうアート、すなわち人間のエネルギーが噴き出す非言語であり、非効率な表現である身体の語りに対して蓋をして暗渠的認識化していくことに繋がる。かつて日常にあったはずの祝祭、身近にあったアートは、制度化され、非日常化された貴重なものとして、保存箱の中に収蔵され、山との関係と同様に断絶されるに至ったと言える。

この展覧会は、その途切れてしまったストリームを感じ取り、日常と祝祭が切り離されない、我々の身体と地続きの回路を再発見するための心臓として機能し、同時に私たちに在る個人個人のストリームを同期させる実践となる。アートを顕現させる実践者であるアーティストが固形化させたアート作品を参考にしながら、来場者一人ひとりがそれぞれの方法を発見し、ストリームを再発見し、今一度エネルギーの器となる。

空の青さは、蓋を開けて見上げると見る事が可能であるように、アートは私たちに関係のないものではないだろう。あなたにもストリームのように流れ続けるアートがある。さらに言えば、我々の身体の中に流れる血脈、身体の大部分が水分であることを知っているように、これはあなた自身の個人の認識を超えた物語への参加の旅なのである。

この展覧会は、世阿弥の複式夢幻能の構造から強い影響を受けている。展覧会全体を、シテ、つまり亡霊や精霊のようなものの記憶が現前する「夢のまた夢」の構造として捉え直す、この構造を取り扱うことでの死生の間領域の空間化、そして被経験が今回の狙いの一つともいえる。

まずは、何者かわからない面影の写真からはじまる。音を聴き、香りを嗅ぐ。ここは、楽屋空間であり、生まれる前の死の広場とも言える。

そして、顔にパンを巻いた人間ではない者に誘われるように生の広場へ立ち入る。

最後には、出産までの経過についてのテキストを元にしたパフォーマンス作品によって、我々は産まれる瞬間に立ち会い続ける。観客は、この循環を完成させる旅人としての「ワキ」としても設定される。

また、本展では、日本におけるアートとお祭りの関係や、祝祭の場についても考察し参考とした。特に岡本太郎が象徴した大阪万博1970の中心地として設計された「お祭り広場」は、近代日本においては実際に、内向的な各地のお祭りとは異なり、外向的な祝祭の頂点であった。本展は、その熱狂的な祝祭の批評的実践と残滓と対峙しながら、機能的に再編された現代の都市空間、この埋立地である天王洲運河エリアのような夢の地において、多層的な夢幻としてのアート展を用いてこの周辺と2025年付近を再構築することに挑戦した。

それぞれが己や足元の暗渠化された歴史を振り返り、自らの内なる水脈を再接続させる場としてのアート展、そして各アーティストのヴィジョンによって価値と存在が交換される場となり、観客の無意識を再構築する。

そして、今もなお続く戦争やパンデミックで亡くなった方々、そしてこれまでMEET YOUR ARTを支えていたキュレーターの山峰潤也さんへのレクイエムとして。そしてこの時代に産まれてきた多くの子にこのARSを捧げます。

Art as the Circulatory System in Society An Analogy of the Urban Waterways' Culvertization

This text serves as the Curation Note for the ART EXHIBITION area, "Ahead of The Rediscovery Stream," at the MEET YOUR ART FESTIVAL (hereafter, MYAF).

MYAF is an editorial space held in the Terada Warehouse area near Tennozu Isle Station, where music lives, paintings, sculptural works, spatial art, food, crafts, and goods are presented—as if a cultural magazine had manifested as a city or a town. Indeed, one could argue that the magazine itself is an imitation, or a copy print, of the urban environment. An exhibition, which addresses the historical and critical perspectives of artists, architects, and designers, might also be considered a spatial magazine, which is then further adapted into a book.

I am co-curating the ART EXHIBITION area, one of the distinct sections within MYAF.

This year, dancer and actor Mirai Moriyama took the role of Artistic Director, determining the overall policy and title.

"Ahead of The Rediscovery Stream" (hereafter, ARS)

Literally translating to "beyond the rediscovered flow," this title itself embodies the attitude of rediscovering the value of existing things through editing and curation.

It reflects a philosophy of circulation, where the stream is recirculated, leading to the transmigration (reincarnation) of values and matter.

This led us to consider: What does art offer to this turbulent society? Two major turning points in my personal life have profoundly influenced this exhibition: first, my own experience of parenting since last October, and second, the sudden death earlier this year of curator Junya Yamamine, who invited me to MYAF last year.

The theme addressed here expands upon the aforementioned policy, incorporating my own interpretation and intention. We adopt the concept of a circular economy that produces no industrial waste. We contemplated community, individual death, and cultural succession. Both can be viewed as the inheritance of resources. When parenting, the time one once held

exclusively disappears , merging into family time. This sensation of time flowing out is itself a form of succession—the feeling that the time that has flowed out endlessly circles like water.

Art, I suggest, acts as a circulatory system for time, a heart, a pump in human life.

Could art be the fundamental heart of humanity, society, and community, fulfilling the function of a pump that pushes blood flow and enables circulation?

I believe it is a second heart, separate from the essentials of life (food, clothing, shelter), and a hidden social infrastructure.

When did this flow become concealed?

Art can be said to exist outside of the life-work balance. Might it function as a balancer for our fundamental vitality, one of society's essential systems? That is to say, society functions as a single body, and art operates as its heart, governing the circulation and exchange of life energy.

In urban areas, water—not just in Tokyo, but in all major cities—has developed alongside waterways, and this water flow can be called the city's bloodstream. Art is the apparatus or function that promotes this circulation and exchange.

The artist is the one who grasps and solidifies that invisible, indispensable, and air-like entity called art; the solidified form is called a work of art; and the space where that work is installed becomes an art exhibition. The curator, in this context, becomes the intermediary between the artist, the space, and the related parties and viewers who gather there. If the exhibition is the heart, what then is the curator?

In nature, when human settlements—a gathering of visions—are formed, the cycle of water veins, such as waterfalls that flow year-round or fog that rises after rain, remains visible as an exposed spectacle.

It is a magnificent beauty, yet also a threat that can invite death if approached too closely. Nevertheless, by dwelling in that flow, transcending life and death, we recognize ourselves as members of this stream. We drink that water, expel it, and recognize the transcendence of our own life and death through changes in the volume of rain and river water. Looking back, does not "coming to awareness" occur the moment one recognizes one's own mortality?

This is something I experienced while staying in Shimo-kitayama Village, in the southern part of Nara Prefecture, in 2023. I still recall the shift in my perception when one of the villagers said, "The mountain is water." Functionally, a mountain is a massive circulatory system that stores water through the collaboration of tree roots and soil. However, this is merely book knowledge, not a direct visual experience. Instead, the mountain appears before my eyes as water. The mountain manifests as something that transcends the human scale of life, appearing as a time tunnel. I recognize that I, too, am a participant in this cycle of water.

In Nōgaku (Noh drama), if the curb of the well in Izutsu—an apparatus that brings the past into the present for the protagonist, the Shite—is replaced by the mountain, and the mountain itself functions as a device that traverses time and space, a "Mountain Time-Tunnel," then our consciousness converges with the multiple streams that define our existence, leading to an experience of communal consciousness and assimilation with the mountain. Shimo-kitayama Village itself becomes a stage where Noh is continually performed.

However, I usually lack the capacity to recognize such things. I live in the city, the stage for human-centered economic activity, a place where such awareness is deemed unnecessary. The city, prioritizing safety and efficiency in life, is indispensable to us, but it regularly black-boxes and controls the relationship with the environment that might otherwise lead us to transcend our worldview. It normalizes concealment, readily closing off things like a culvert. As relationships become invisible, our stream, fragmented and commodified, is cut into pieces, making an ontological connection and recognition difficult. This sensation can be understood as the rise of individualism, resulting from the culvertization (ankyōka) of even the waterways of blood and time flowing through our own bodies, concealing this essential flow even from the self.

Putting a lid on the water vein stream in the name of expanding living space and increasing efficient ground area is a trade-off for efficiency, simultaneously fostering a consciousness that normalizes the concealment of something.

This applies not only to water veins. It extends to the ankyō-like concealment of art that should have been present in our spirit and daily lives—that is, the narrative of the body, a non-verbal and inefficient expression from which human energy bursts forth. The festivals that were once part of daily life, the art that was close at hand, have been institutionalized, treated as non-ordinary precious objects, housed in conservation boxes, and thus severed, much like our relationship with the mountains.

This exhibition functions as a heart for sensing that broken stream and rediscovering the continuous circuit—one contiguous with our bodies—where the everyday and the festive are not separated. At the same time, it is a practice for synchronizing the individual streams present within each of us. Taking inspiration from the solidified art works created by the artists, the practitioners who manifest art, each visitor will discover their own method, rediscover the stream, and become a vessel for energy once again.

Just as the blueness of the sky becomes visible when we lift the lid and look up, art is not something unrelated to us. You, too, possess an art that flows continuously like a stream. Furthermore, knowing that the bloodstream flowing through our bodies, and the majority of our physical composition, is water, this is a journey of participation in a narrative that transcends your individual self-awareness.

This exhibition is strongly influenced by the structure of Seami's Fukushima Mugen Nō (Double-Structure Phantasmal Noh). The whole exhibition is reinterpreted as a structure of "a dream within a dream," where the memory of the Shite—the ghost or spirit—is brought into the

present. Spatially rendering this liminal zone between life and death by utilizing this structure, and making it an experience, is one of the aims of this project.

The journey begins with a photo of an unknown visage. We listen to sounds and smell scents. This is the backstage space, or perhaps the public square of death before birth.

Then, we are led into the public square of life by a non-human figure with bread wrapped around their face.

Finally, through a performance piece based on text that narrates the process leading up to childbirth, we continuously bear witness to the moment of being born. The audience is also positioned as the Waki (the traveler) who completes this cycle.

Furthermore, this exhibition considered and referenced the relationship between art and festivals in Japan and the nature of the festive space. Notably, the "Festival Plaza" (Omatsuri Hiroba) at the heart of the 1970 Osaka Expo, symbolized by Tarō Okamoto, was in modern Japan the zenith of extroverted celebration, contrasting with the introverted local festivals. This exhibition confronts the critical practice and residues of that enthusiastic celebration, challenging us to reconstruct this surrounding area and the period around 2025 by employing a multilayered phantasmagorical art exhibition in a functionally reorganized modern urban space—a dreamlike location like this reclaimed land of the Tennozu Canal area.

The art exhibition becomes a place where each person reflects on their own history, which has been culvertized at their feet and within themselves, reconnecting their inner water veins. It becomes a site where value and existence are exchanged through the vision of each artist, restructuring the unconscious mind of the audience.

And finally, this is dedicated as a requiem to those who have died in ongoing wars and pandemics, and to the curator Junya Yamamine, who previously supported MEET YOUR ART.